様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３４４２８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０３０３

研究課題名（和文）英国版「コリンナ」の系譜と女性セレブリティ：ジューズベリー姉妹とブロンテ姉妹研究

研究課題名（英文）Representations of 'English' Corinne and Female Celebrities: A Study of Jewsbury Sisters and Bronte Sisters

研究代表者
皆本　智美（Minamoto, Tomomi）

摂南大学・外国語学部・准教授

研究者番号：２０４４１１０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、フランスのスタール夫人が著した小説『コリンナ』に対してイギリス人作家が示した反応を読み解くことにより、19世紀前半における英国女性と公共圏をめぐる問題および女性のナショナリティ意識をめぐる問題と両問題の連関について分析・考察するものである。著作中に「コリンナ」のモチーフが見られるジューズベリー姉妹とシャーロット・ブロンテを中心に調査した結果、大陸女性との差別化のなかにイギリス人女性を位置づける様相が観察されたが、それはイギリス側のヨーロッパに対する錯綜した態様の発現と解釈されるものであった。

研究成果の概要（英文）：This study aims to elucidate two issues and the relations between the two, if any, through examining how British writers responded to “Corinne, or Italy” written by Madame de Stael. First, the issue of the public sphere for British women in the early nineteenth century is examined, specifically the female celebrities in that period and the problems they faced. Second, their consciousness of nationalities then emerging is explored. In the works by the Jewsbury Sisters and Charlotte Bronte, the main objects of this study, British female characters tend to be set against those from continental Europe, some of whom are represented as celebrities, but their relations are complicated. These relations attest to the intricate and ambivalent attitudes of the British toward European nations.

研究分野：人文学

キーワード：ブロンテ　ジューズベリー　スタール　国民性　女性　公共圏　イギリス文学　フランス文学

１．研究開始当初の背景

イギリスとヨーロッパ大陸との関係は「近くて遠い」とあらわされるとおり、長い歴史を通じて複雑な様相を呈してきた。本研究対象年代には、1815 年まで続いたナポレオン戦争も終わっていたが、フランスはじめヨーロッパ大陸諸国の動向はかつてなかったほどイギリス社会に大きな影響を与えていた。ヨーロッパ大陸の事象に対してイギリス側が示した反応については、歴史学のみならず文学研究においてもさまざまに検討されてきたが、当時の女性作家に関する研究が見直されるなか、本研究は 19 世紀前半のイギリス作家がどのようにイギリス女性をヨーロッパ大陸女性と差別化し、イギリス女性の自己形成に寄与したかについて検証することを目指したものである。

本研究者は 2007-2008 年度科研費若手研究（スタートアップ）の助成を受け、1820 年代から 1830 年代にイギリスで流行したリテラリー・アニュアルについて調査し、フランスのスタール夫人が著した小説『コリンナ』が当時ヨーロッパ中で人気を博し、リテラリー・アニュアルにおいてもそのモチーフが見られることに気付いた。『コリンナ』の主人公はイタリアで活躍する著名な女性詩人であるが、詩人という職業とイギリス人男性との恋愛の間で引き裂かれる。2009-2010 年度科研費若手研究（B）「フェリシア・ヘマンズとレティシア・ランドンに関する研究」では、ヘマンズとランドンの両詩人が「コリンナ」のモチーフを自身の詩作に活かしていることがわかった。そこで、ほかのイギリス人作家の著作においても「コリンナ」の表象を精査し、それらを系統的に整理することの意義を認識するようになり、以上のような視点から、19 世紀前半のイギリスにおける（１）女性と「著名性」をめぐる問題と（２）女性の「ナショナリティ（国民性）」意識形成やナショナリズム台頭について、および両者の連関をさぐる本研究の着想にいたった。

２．研究の目的

本研究の目的は、フランスのスタール夫人が著した小説『コリンナ』に対して 19 世紀前半の英国作家が示した様々な反応を読み解くことにより、イギリス人女性の自己形成に関する様相の一端を解明することである。

分析にあたっては、女性の公共圏進出をめぐる問題と著名性にかかわる問題を「セレブリティ」というキーワードを切り口に調査し、イギリス人女性作家の著名性に対する意識や、著作中に描かれる女性登場人物の著名性について考察して、まず当時の女性セレブリティの表象をあきらかにすることを目指した。そのうえで、女性セレブリティがイギリス人女性のナショナリティ意識ひいてはナショナリズム形成にかかわっていたか、かかわっていたとすればどのように関与していたか、その様相や様態についてあきらかにすることを目指した。

具体的には、「コリンナ」のモチーフを著作中に援用したことが判明しているジューズベリー姉妹（Maria Jane Jewsbury と Geraldine Jewsbury）とシャーロット・ブロンテ（Charlotte Brontë）を中心に取り上げ、彼女等の著作における「コリンナ」の表象および彼女等自身の経歴が（１）「セレブリティ」をめぐる問題、（２）「国民性（ナショナリティ）」をめぐる問題にどのようにかかわっているか、その様相をあきらかにすることを第一の目的として、必要に応じてほかの作家についても分析を進めることにした。

ジューズベリー姉妹とブロンテ姉妹が生きた時代は、ロマン派からヴィクトリア朝へイギリス社会や文学の思潮が大きく変化した時代だったので、本研究で扱う作家たちをその思潮の変容のなかに位置づけることも目的の一つとした。

３．研究の方法

（１）セレブリティ概念の整理

スタール夫人は生存中に絶大な著名性を誇っていたにもかかわらず、当時の影響力と比較してその著作についての研究が滞っていたが、没後 200 周年を迎えるにあたって見直しが進められつつあるので、まず彼女の経歴と主要著作の内容およびそれらが当時の社会に与えたインパクトを確認するところから始めた。また研究対象年代における「女性の公共圏進出に関する研究」や、「女性と著名性に関する研究」が近年注目されつつあるので、先行研究を調査し、両研究の関連性を整理することにも着手した。

女性セレブリティの研究にあたって特に参照した文献は次のとおりである。Tom Mole, *Romanticism and Celebrity Culture 1750-1850* (2009). Claire Brock, *The Feminization of Fame, 1750-1830* (2006). Ann R. Hawkinds eds, *Women Writers and the Artifacts of Celebity in the Long Nineteenth Century* (2012). Brenda R. Weber, *Women and the Literary Celebrity in the Nineteenth Century: The Transatlantic Production of Fame and Gender* (2012).

研究対象年代には、職業作家としての地位を確立した女性の数は増大していたが、同時代の女性セレブリティについて考察する際には、職業上、身体的露出を要する女優という職業を考察対象とする必要性が判明したため、研究期間に可能な限り、演劇界における女性著名人についても調査・考察の対象とした。具体的には、Sarah Siddons と Mary Robinson について、彼女たちの経歴をたどり、

彼女たちが体現した女性セレブリティの概念を可能な限り整理した。

（２）ジューズベリー姉妹の経歴と著作についての調査

生前のジューズベリー姉妹は文壇で一定の評価を得ていたものの、没後は忘却されていた期間が長く続いたため、その経歴や功績について国内外の図書館で調査した。姉のマライア(1800-33) はワーズワス家と、妹のジェラルディーン (1812-80) はカーライル家と親交を結んでいたことが先行研究によりわかっていたので、その関係が綴られていると推察される書簡のうち未刊行のものを海外図書館で調査した。また姉妹はともに多くの文芸書籍や文芸誌に関わっていたので、それらについても調査した。具体的には、*Forget-me-Not*, *Literary Souvenir*, *The Amulet*, *Winter's Wreath*, *Ackerman's Juvenile Forget-me-Not* などのリテラリー・アニュアルや *Athenaeum*、*Household Words*, *Westminster Review* などに寄稿された著作を精査した。また単行本として刊行された著作についても精読しつつ、本研究課題との関連について分析し考察した。

（３）女性と著名性に関わる問題およびナショナリティとナショナリズムに関わる問題についてのシャーロット・ブロンテの態度に関する分析

Linda Colley がイギリス人の国民意識形成をアンチ・フランス、アンチ・カトリックという構図に帰し、シャーロット・ブロンテをその例として取り上げて以来、従来の研究はブロンテのナショナリスティックな側面に傾注するきらいがあったが、本研究ではそのような先入観にとらわれることなく、ブロンテの書簡やベルギー留学時代のエッセイを通読・分析することによって、ブロンテの人生におけるヨーロッパ大陸観の変遷を追うことに努めた。またブロンテの書簡を再読することによって、「公人」としての自覚の発現や、公的領域への進出を阻むジェンダー意識について分析し、それらとブロンテの英国人としての意識との関連について考察した。

（４）シャーロット・ブロンテの著作における著名性に関わる問題とナショナリティに関わる問題についての分析

シャーロット・ブロンテの小説を再読し、本研究課題に関わる部分について再考した。

（５）ジェイン・オースティンの著作についての分析

研究開始当初はオースティンの著作を本研究対象に含めることを計画していなかったが、３.（１）に示したとおり、Sarah Siddons について調査する中でオースティンとの接点を見出し、ヨーロッパ大陸との比較において、オースティンの小説『分別と多感』に観察される「イギリス的」感受性について分析した。

４．研究成果

（１）ジューズベリー姉妹について

姉のマライアは「ある熱狂者の物語」において、独・仏の小説に毒されたイギリス人女性主人公が著名作家になることをめざして夢を実現するものの、著名性獲得の代償として家庭生活を喪失する過程を描き、英国版「コリンナ」の定型を踏襲したといえる。しかしマライア自身の経歴を調査すると、リテラリー・アニュアルの発行によって文壇に影響力を持っていた Alaric Watts に才能を見出されて以降、ワーズワス家との交流や、ヘマンズとの親交等、きわめて意識的かつ着実に文壇への進出を果たしており、自身の著作で否定的に描いたキャリアを自らがたどっていることがわかったので、この矛盾とその意味するところについて５.〔図書〕（３）で論じた。

妹のジェラルディーンは姉の軌跡を追うように文壇に進出し、同様に「コリンナ」のモチーフを用いた小説を執筆している。そのモチーフが顕著な小説『異母姉妹』を中心に分析した結果、『異母姉妹』においては『コリンナ』の提示した構図が反転されて示されていることが確認できた。『異母姉妹』は冒頭で、『コリンナ』が提示した「イギリス女性の活動領域＝家庭」という図式を示しながら、小説の展開においてその図式を脱構築していることを５.〔図書〕（１）と（６）で論じた。

（２）シャーロット・ブロンテについて

ブロンテはイギリス国教会牧師の娘であり、十代の頃から他宗派に対する嫌悪感を表した記録が残っていて、ベルギー留学経験をとおしてそれらに対する否定的見解を強めた形跡がある一方で、カトリックやメソディズムに対する寛容な姿勢も早くから観察される。本研究では、特に小説『教授』、『シャーリー』、『ヴィレット』におけるヨーロッパ大陸諸国表象の分析を通じて、作者の宗教観とヨーロッパ大陸観の関係について再考できたことが主要な成果の一つであった。ブロンテの著作中に見られる、著名性および身体の可視性をめぐる問題、出自や宗派によって差異化された身体表象、ヨーロッパ大陸各国表象の区別について検討し、その一部を５.〔雑誌論文〕（１）、〔学会発表〕（１）（２）（４）、〔講演〕（１）、〔図書〕（２）（６）にまとめて公表した。

（３）今後の展望について
本研究を通して、ジューズベリーやブロンテはヨーロッパ大陸各国の表象を差異化しながら自国女性を位置づけていることが確認されたので、18 世紀末から 19 世紀前半のイギリス女性作家による著作をヨーロッパ大陸各国との多元的な関係の中に置いて体系的に再考する意義を認識し、基盤研究（C）課題番号 18K00399 の着想にいたって、本研究を発展させることになった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）
（１）皆本智美、「英国人作家シャーロット・ブロンテとヨーロッパ：『教授』におけるヨーロッパ表象」『ブロンテ・スタディーズ』、第 6 巻第 2 号、2016 年 10 月、pp.91-109、査読無。

（２）Tomomi Minamoto, “‘English' Sensibility in *Sense and Sensibility*” 『摂大人文科学』第 25 号、2018 年 1 月、pp.101-116、査読有。

〔学会発表〕（計 4 件）
（１）Tomomi Minamoto, “Charlotte Brontë and *The Professor*”, Forgotten Books and Cultural Memory, Taipei Tech University, Taipei, 27 May 2016.

（２）Tomomi Minamoto, “Charlotte Brontë: A Romantic Victorian”, Romantic Legacies, National Checngchi University, Taipei, 18 Nov. 2016.

（３）Tomomi Minamoto, “Narrative Rights and Narrative Strategies in Charlotte Brontë’s *Jane Eyre*”, Narrating Rights: Literary Texts and Human, Nonhuman, and Inhuman Demands, ELLAK International Conference, Seoul National University, Seoul, 13-15 Dec. 2017.

（４）皆本智美、「『教授』における‘passion’再考」、日本ブロンテ協会関西支部 2018 年大会シンポジウム「歴史のなかのブロンテ」、2018 年 3 月

〔講演〕（計 1 件）
（１）皆本智美、「シャーロット・ブロンテと非日常」、ブロンテ・デイ公開講座、横浜市立大学、2016 年 6 月 5 日。

〔図書〕（計 6 件）
（１）皆本智美、「コリンナと『異母姉妹』：ジェラルダイン・ジューズベリーの『異母姉妹』に関する一考察」、共著『イギリス文学と文化のエートスとコンストラクション』、大阪教育図書、2014 年、pp. 283-90、査読無。

（２）皆本智美、「英国女性ルーシー・スノウと『ヴィレット』における視線」、共著『ブロンテと 19 世紀イギリス』、大阪教育図書、2015 年、pp.175-85、査読有。

（３）皆本智美、「女性と名声――『ある熱狂者の物語』に関する一考察」、共著『文芸礼讃』、大阪教育図書、2016 年、pp.99-107、査読無。

（４）皆本智美、「ブロンテ姉妹著作目録」・「ブロンテ姉妹主要文献案内」、共著『ポケットマスターピース　ブロンテ姉妹』、集英社、2016 年、pp.734-62、査読無。

（５）皆本智美、「オースティンと『英国的』感受性――同時代の演劇と小説から読み解く『分別と多感』」、共著『ジェイン・オースティン研究の今：同時代のテクストも視野に入れて』、彩流社、2017 年、pp.35-52、査読有。

（６）皆本智美、「『コリンナ』へのオマージュ――ジューズベリー姉妹とシャーロット・ブロンテ」、共著『ブロンテ姉妹の子どもたち――ブロンテ姉妹の遺産と影響』（仮題）、春秋社、2018 年刊行予定、査読無。

〔書評〕（計 1 件）
（１）皆本智美、「書評の饗宴　Juliet Barker “The Brontës”」『ブロンテ・スタディーズ』第 6 巻第 1 号、2015 年 10 月、pp.83-89。

〔翻訳〕（計 1 件）
（１）皆本智美、エリザベス・ラングランド著「階級」pp.367-75、『歴史のなかのブロンテ』マリアン・トールマレン編、彩流社、2016 年、共訳、pp.367-75。

６．研究組織
(1)研究代表者
皆本智美（MINAMOTO, Tomomi）
摂南大学外国語学部、准教授
研究者番号：20441107